



灯火親しむべし

副校長 尾澤 佳彦

私事で恐縮ですが、子どものころは本を読むのが大好きでした。小学生の頃は枕もとの本棚においてある講談社の「世界の名作図書館」のなかから手当たり次第に読んでいたものです。暇さえあれば本を読んでいました。もしかするとそこで一生分の読書をしてしまったのかもしれませんが。今はじっくりと本と向き合うことが少なくなってしまいました。

活字から離れてしまっているのは私だけではなく、近年は若者の活字離れも取沙汰されています。文部科学省も、読書することは「考える力」、「感じる力」、「表す力」等を育てるとともに、豊かな情操をはぐくみ、すべての活動の基盤となる「価値・教養・感性等」を生涯を通じて涵養していく上でも、極めて重要である。また、特に、変化の激しい現代社会の中、自らの責任で主体的に判断を行

いながら自立して生きていくためには、必要な情報を収集し、取捨選択する能力を、誰もが身に付けていかなければならない。すなわち、これからの時代において、読み・調べることの意義は、増すことはあっても決して減ることはない。と述べています。（「これからの学校図書館の活用の在り方等について（審議経過報告）」より）

様々なメディアが発達・普及し、生活環境が以前のものとは激変する中で、読書することの必要性・重要性を今一度考えていく必要があります。

さて、10月27日から11月9日までの、文化の日を中心とした2週間が秋の読書週間となっています。今年の標語は「最後の頁を閉じた 違う私があった」です。本校でも、11月を読書月間として本に親しむ活動を行います。

本を読むことで様々な知識を得、こころが育ち、友達や周りの人の考えや気持ちが変わるようになります。読書の習慣を身につけ、その楽しさを味わうことで「最後の頁を閉じた 違う私があった」という経験をたくさんさせていきたいと思います。そして、今年の読書週間は自分自身も、秋の夜長にじっくりと書物と向き合いたいと考えています。

